

組込製品でのLinuxは、

バイナリ形式で組み込まれる

その条件をGNU GPLv2で見ると

GNU GPLv2 第3条

3. あなたは上記第1条および2条の条件に従い、**許諾条件1**のOSSライセンス規定)『プログラム』(あるいは第2条における再配布)を**オブジェクトコード**ないし**実行形式**で複製または**頒布**することができる。 **許諾内容**

ただし、その場合あなたは以下のうちどれか1つを実施しなければならない

a) 著作物に、『プログラム』に対応した完全かつ機械で読み取り可能なソースコードを**添付**する。(中略) **「ソース公開」とは書いていない**

b) 著作物に、(中略)ソースコードを、(中略)提供する旨述べた少なくとも3年間は有効な書面になった**申し出を添える**。(以下省略) **許諾条件2**

この二つの行為を合わせて私は「ソース開示」と読んでいます。ソース開示方法a)とb)のメリット/デメリットをご存じだろうか？

ソース開示方法によるメリット/デメリット

ソース開示方法	a)	b)
による違い	ソース添付	申し出添付
製品にソース格納媒体が	必要	不要
著作権表示・ライセンス	同梱済み	抽出要

ソース開示方法b)申し出添付 が選択される理由

- なるべく、ソース開示したくない、という企業心理？
- コモディティ製品では、CD一枚の部材増加は重い？

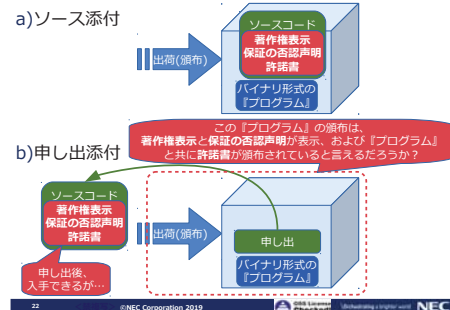
ソース開示方法b)申し出添付 のデメリット

- 添付後3年間は、受付対応が必要
- 第1条条件を別途満たす必要がある

1. それぞれの複製物において適切な**著作権表示**と**保証の否認声明**を目立つよう適切に掲載し、またこの許諾書および一切の保証の不在に触れた告知すべてをそのまま残し、そしてこの**許諾書**の複製物を『プログラム』のいかなる受領者にも『プログラム』と共に頒布する...

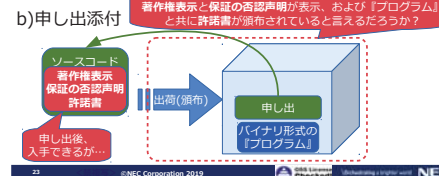
a) ソース添付ならば、ソース形式で「『プログラム』と共に頒布される」

ソース開示方法の違いを図示



コミュニティの多くは容認

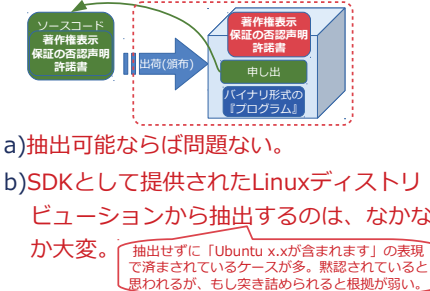
- 「結局、入手できるから、いいじゃないか」(容認する)と思っているかもしれない、
- 実は、(容認するつもりではなかったけど)条文を読みこなせていないだけかもしれない。



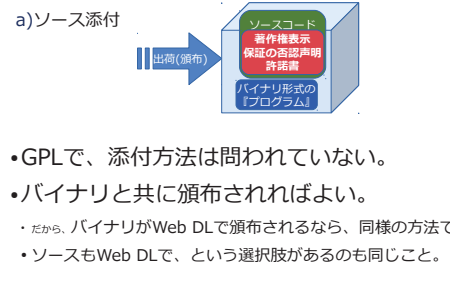
2007年、Skype社がGPL違反で提訴された事例

- SMC社製IP電話をSkype社がWeb販売
- GPL違反を認識し、一旦販売し停止
- ソースがWebから入手可能な旨を述べた申し出を添付の上、販売再開
- Harald Welte氏との裁判で申し出を添付したから起訴理由がなくなったと主張
- 判事が**ライセンス文(許諾書)**を付けなければならぬと述べ、10万ユーロの賠償金(?)。販売差止の仮処分も申し立て。裁判になると条文通りに「『プログラム』と共に頒布」しないと危険(?)

許諾書等は『プログラム』と共に頒布が勧め



可能ならば、ソース添付が勧め



さらに、ソース格納媒体を製品本体にする対処案

一般に、製品のソース添付する場合、CD/DVDなどの媒体に格納して媒体添付する、と思われているが、**そう、GNU GPLに書かれては、いない。**

製品本体のディスク/メモリ内に格納するメリット。

	バイナリソースコード	バイナリ
部材(原価)の増加	なし	あり
付属媒体の散逸の可能性	なし	あり

製品内ソースコードへのアクセス手段は、条件ではない

ソースコード開示が必要な理由を考えてほしい

自由ソフトウェアとは？ <https://www.gnu.org/philosophy/free-sw.html>

プログラムがどのように動作しているか研究し、必要に応じて改造する自由(第一の自由)。

ソースコードへのアクセスは、この前提条件となります。

(このバイナリ)プログラムがどのように動作しているか研究し、必要に応じて改造する、のだから

バイナリにアクセスできているのが前提

その前提ならば、その横にソースコードが格納されていて不都合はないはず。

ソース開示していることが分からないのでは？

GNU GPL遵守を**示す**ためにソース開示するのではない

再頒布されるプログラムも**自由ソフトウェアであるように**、GPLで条件付きの再頒布が許諾されている。

改変の自由(第一の自由)の対象にアクセスもしない、つまり、**バイナリにアクセスもしない受領者にソース開示していることを示すという条件はGNU GPLにはない。**

※それでも「**見えていなければGPL違反だ**」と言う人はいる。**GNU GPLを正しく理解していない**かと思えないが、煩わしさを回避するために媒体添付するという**選択肢もある**。

古典的なUNIX文化のようにソース頒布を基本に

バイナリ

ソースコード

ビルド

xx.patch

ソースコードで頒布して、ビルド。

updateもpatchファイルを作成し頒布

patchコマンドでソース更新しビルド

updateをpatchファイルで頒布するメリット

- テキスト形式だから、GNU GPLv2第2条の条件を満たせばよい
- ソース開示(GPLv2第3条)を気にしなくてもよい
- バイナリのupdateもOSSのバイナリ形式での頒布で第3条ソース開示が条件
- ソース開示していないことを指摘されたトラブルは少なくない

トラブルが少ない対策案としてお勧め

他を選択するならば、理解を高めること！

著作権を基にして、「**結合著作物**」で考えると

GPLの伝播の誤解、例えば

ウィキペディアのGPLのライブラリの説明の何が、間違った言い分が、何が、正しい言い分が、わかる

https://ja.wikipedia.org/wiki/GNU_General_Public_License

ライブラリ

…、次のようないくつかの異なる見解が存在する。

見解：プロプライエタリ・ソフトウェアを動的リンク、静的リンクすることはGPLに違反する

見解：プロプライエタリ・ソフトウェアを静的リンクすることはGPLに違反するが、動的リンクに関しては不明瞭

見解：リンクは無関係である

GNU GPLの理解を高める、お手伝いします

■OSSライセンスと著作権法 講義(3H)

第1章 OSSは一般に他人の著作物

第2章 著作物の「利用」とは「著作権の行使」

第3章 ライセンス違反は著作権侵害

第4章 著作権行使の許諾と理解して各OSSライセンスの条文を読む

第5章 **結合著作物**に関する詳細と新たな問題

第6章 基本的な対策例

補遺 GPLv3について など

補遺2 体制例

次回、2019年3月8日(金) NEC本場で実施。一人8万円の公開(公衆)セミナーの開催も可能

詳細は、<https://jpn.nec.com/oss/oss/> 掲載PDF参照

他社と同等、補遺テキスト無し、短縮4.5H

Orchestrating a brighter world

NEC